

# 私が幼児教育を志した頃

——最終回——

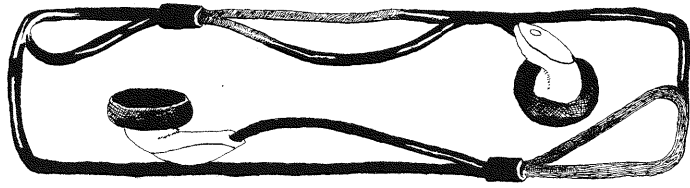
津守 真

アメリカから帰って

昭和二十八年（一九五三）八月、私のアメリカの旅は終わった。

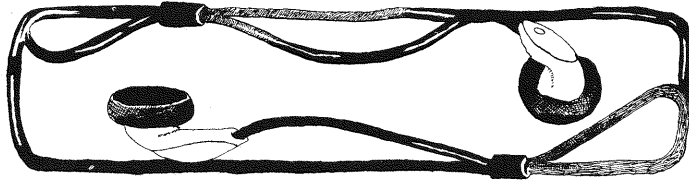
一年十カ月の間に、日本の社会は変化していた。

帰国して私が第一に驚いたのは、「道德教育」という語が頻繁に聞かれたことだ。いまでは殆ど信じられないかもしれないが、戦争が終わった直後から昭和二十六年の頃までは、教育界でこの語を聞くことは殆どなかった。そのくらい戦時中の道德は新しい枠組みの中で考え直さねばならないと一般に考えられていた。小学校では教



科書も墨で塗りつぶし、教育勅語を暗唱することもなくなった。国家を中心とした忠君愛国の道徳とは違う、人間的で普遍的な価値観を人々は探っていたが、新しい言葉が見つからないうちに古い言葉が登場してきたという印象を私はもった。それは早くも日本の右傾化を暗示するように思われた。

第二に驚いたのは、「保育要領」に代わって「幼稚園教育要領」(案)が力をもっていったことだった。「保育要領」は幼児の生活に即したものであったから、保育現場では使いやすいものだった。それに対して「幼稚園教育要領」は、目標の羅列で、一見してそこから幼児の生活は見えてこなかった。そのうえ私に疑問だったのは、文部省が定めたものが幼児教育の根拠となるという考え方であった。コメニウス、ペスタロッチ、フレイベルの幼児教育思想、さらにその後の進歩主義教育の歴史はどう関連するのかということだった。保育要領は米国教育使節団のヘレン・ヘファナン女史に負うところが大きい。彼女は米国の進歩主義教育の全盛期を生きた人である。いま『文部省幼稚園九十年史』(昭和四十四年刊一九六頁)を参照して見ると、「昭和二十七年、わが国の独立を契機として高まった教育の全面的な再検討の機運とあいまって、昭和三十一年二月に保育要領が改訂されて幼稚園教育要領となった」と記されている。昭和二十七年というところが私がアメリカ留学中のことである。こうしてみると、この時期が日本全体の右傾化の発端をなしているようである。



帰国したばかりの私は、多くの人からアメリカの最先端の研究を尋ねられたが、私にとってはこの二つがいつまでも消えずに心に留まった。

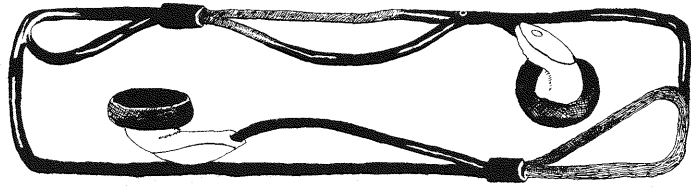
### その後

アメリカから帰って直ぐに私はお茶の水女子大学に復職した。

附属幼稚園で私が毎日見ていた、幼児が一日中遊ぶ姿の中に幼児教育があるという考えは、帰国して後も少しも変わらなかつた。心理学者としてその続きをどうするかということが私の課題だった。附属幼稚園の中に家政学部児童学科の研究室があつて、私は、毎日子どもたちの遊びとそれを生み出す保育を眼前にしながら、心理学はどのように貢献できるかを考えた。それを探つて実に長い年月を経ることになった。

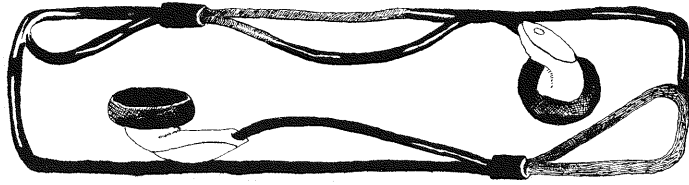
アメリカの進歩主義教育協会は私がアメリカから帰って二年後の一九五五年に解散された。アメリカから届く心理学の新しいジャーナルは、子どもの活動を中断して遊びの実験場面をつくり、教育効果のあがるプログラムを作ろうとする研究が主流だった。アメリカも変化しつつあった。

私がミネソタ大学を去つて間もなく、それまでミネソタ大学に直属の独立児童研究所が教育学部付属研究所となり、名前も Institute of Child Welfare から Institute of Child Development (児童発達研究所) と改められた。内容も大幅に変わり、それま



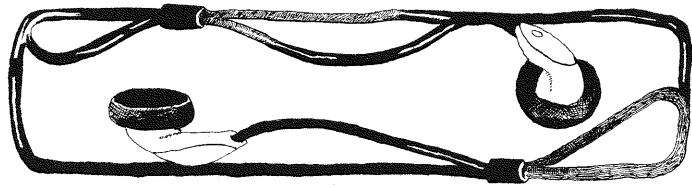
で大きな部分を占めていた両親教育部門は廃止された。そのことを、ハリス先生は非常に残念がっておられた。改組にあたってハリス先生は数年間非常な苦勞をされ、ミネソタを去ってペンシルヴァニアに移られた。一九六八年―一九六九年（昭和四十三年―四十四年）に、お茶の水女子大学は、Dr. デール・B・ハリス教授をフルブライト教授として招いた。ハリス先生夫妻は小石川植物園のそばのマンションの一室に半年にわたって滞在され、児童学科のために講義をして下さった。ハリス先生はお茶の水女子大学附属幼稚園を見て、自分はノスタルジアを感じると言われた。先生はミネソタでの私の修士論文を覚えておられて、最近に出版されたクレミンの「学校の変貌―アメリカの進歩主義教育一八七六一一九五七」（The Transformation of the School-Progressivism in American Education—1876-1957 Vintage Books, New York 1961）をお土産に持って来て下さった。アメリカではプログラム教育が盛んで、ハリス先生はそれに対して批判的だった。先生は児童学科のことをInstitute of Child Studyと呼び入れた。半年の講義の最後に「米国における幼児教育の最近の動向」と「幼児教育理論のための心理学的基礎」を特別講義として加えられた。（デール・B・ハリス、津守真『児童発達教育学』（光生館昭和四十六年）に載せてある。）

昭和四十五年前後、わたしは自分の子どもたちの長期にわたる描画の研究を契機として、ようやく自分の学問的苦惱から脱出しつつあった。



## 二十年ぶりのミネアポリス訪問

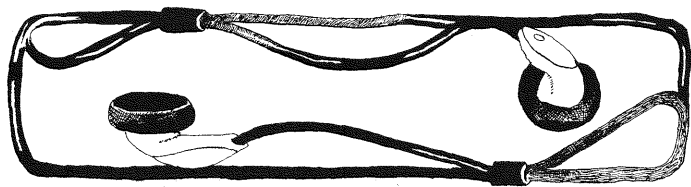
一九五一年以来、私をはじめアメリカに行ったのは一九七一年十二月だった。実に二十年ぶりだった。私の家には四人の子どもがいたし、一ドル三六〇円では自力で行くことなど考えられもなかった。国立教育研究所の平塚益徳先生に誘われて、スタンフォード大学で行なわれた日米幼児教育会議に参加することになったとき、その帰途、ミネアポリスを訪れた。私にとっても私を泊めてくださったミネアポリスの友人達にもそれは感動的な再会だった。飛行場まで出迎えて下さったネルソン夫妻、トンプソン夫妻と共に飛行場から直行して、ミネアポリスでの最初の家クラウンス夫人を病院に訪ねた。「おばさん（クラウンス夫人は私にそう呼ぶようにと言っていた）」は、すっかり痩せて椅子に深々と座っていた。私を抱き抱えて涙を流した。一生のうちこんな再会ができるとは考えられないことだと言って喜んだ。「おばさん」は私がお来ると聞いたときあんまり興奮したので、当日の朝まで日時は教えなかったのとどだった。夜はホワイト夫人が私のために数日間かけて作ったという御馳走のパーティーだった。ホワイト氏はこの頃忘れっぽくて、奇妙な行動があるとのことだった。子ども達が二人とも離婚したことがこの人たちの心の重荷になっていた。翌日はトンプソン家で私との再会パーティーが開かれた。既に亡くなった四人を除いて九軒の家族が家族連れで集まった。三十数人の大パーティーだった。その翌日はビルグリムファウ



ンデーシヨンの友人七、八人が私のために同窓会をしてくれた。子どもも連れて集まった。その顔触れを見て、この人たちが夫婦になったのかと私は二十年振りに合点した。三日間の滞在の後、いまはペンシルヴァニア州立大学に移られたハリス先生をペンシルヴァニアに訪ねた。ペンシルヴァニア州立大学ではアートエデュケーションのDr.バイテルが私の描画の研究を高く評価して、半日スタッフと討論のときが作られた。そのことは保育研究の転回の時にあつた私に自信を与えてくれた。

### その後の友人たち

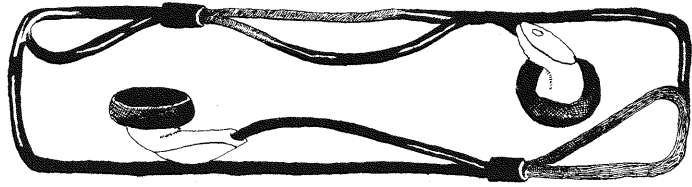
私が三回目にミネアポリスを訪れたのは、一九七四年カナダのモントリオールで行なわれた国際応用心理学会のシンポジウムに、ハリス先生と共に参加した帰途だった。ミネアポリスでネルソン家、ダリオン家に泊まったときには自分の家に帰つたような落ち着きを感じた。数日の滞在だったが、ベトナム戦争によるアメリカの社会の変化を感じさせられた。かつては泥棒がいなことを誇っていたミネアポリスでも、停止信号のときに、ロックされていない自動車の窓からカメラやハンドバックが盗まれるというくらいだった。学生達はキャンパスを裸足で歩いていた。ソニーやミノルタの大きな広告看板が目についた。ミネソタ大学付属ナースリースクールでも知的教育のプログラムがなされていて、幼児の活動はこまぎれだった。私はそこに身をおく



ことに耐えず早々に辞去した。

私が四回目にミネアポリスを訪れたのは、一九八五年にカナダのエドモントンで行なわれた国際人間科学研究会議（HSRC）の帰途だった。そのときはすでに私は愛育養護学校の保育の実践に忙しくしていた。私は妻と共にシカゴのベッテルハイムの学校を訪問した後ミネアポリスに三日間立ち寄った。ネルソン家で私共のレセプションが行なわれた。ある方は亡くなり、ある方は病気で、集まった人の数は半分が減っていた。大学のナースリースクールは前回の時のようなプログラム教育から脱していた。戸外で水たまりに木の葉を浮べて子どもたちが遊んでいた。ひとりの子どもが私に葉っぱをくれるという。私が手を出すと、スプーンに水をすくってくれた。私はスプーンを受け取ってやりとりするうちに、別の子にそのスプーンを渡してしまった。気が付いたら前の子が泣いていた。私とその間で困っていたら、男性の保育者がその子を抱き上げてくれた。担任の先生にそのことを話すと、良いところに目をつけたと喜んでくれた。職員室の書棚には私の知っていた進歩主義教育の時代の書物が並んでいた。医学部の学生が数人実習していたのは新鮮だった。私はアメリカ社会の変化の早さに驚いた。

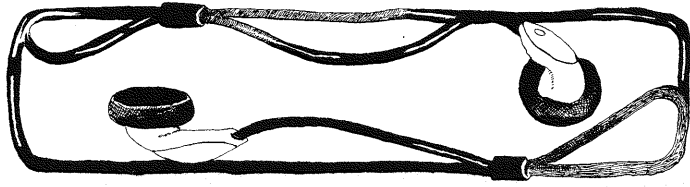
最後に私がミネアポリスを訪れたのは一九九六年、OMEPPの世界理事会がメキシコで行なわれたときだった。私はミネアポリスに一週間滞在した。こんなに長く滞在



したのは学生時代以来なかった。私は障碍をもった子どもが成人した後の福祉を学びたいと思っていた。かつてのミネソタ大学児童研究所の建物「パティホール」には「居住型施設とコミュニティ生活センター」という看板がかかっていた。夏休みというのに大勢の大学院生や研究員が精力的に仕事をしていた。居住型施設は人権に反するという理由で訴えられて閉鎖されつつあり、作業所も閉鎖されて、障碍をもついても普通の職場で働けるようにと人々が力を合わせていた。ピープルファースト運動は一般の人達の間にも広まっていた。障碍をもつ大人の福祉の変化を眼前にして、これは二十世紀が獲得した成果であると私は思った。アメリカの幼児教育の管理主義については耳にしていたが、このときはミネソタ大学付属ナースリースクールを訪問することができなかったのは残念だった。

そのときにもまたネルソン家に泊めて頂いた。夫妻はいまなお嬰鑠としておられる唯一の家庭である。丁度この原稿を書いているとき、私を泊めて下さったひとりであるコルレット夫人が亡くなったことを娘のジーンが知らせて来た。ジーンは私がミネソタを去って後に生まれた。手書きのその手紙には、コルレット家の六人の子どものうちの一人一人の消息と、さらに孫たちの近況まで記されていた。父親と折り合いがよくなかったマギーはカリフォルニアに住んでいて、その娘は海洋学を専攻し、息子は化学を専攻している。いたずら坊主のチャックはミネアポリスに住んで、バレーボー



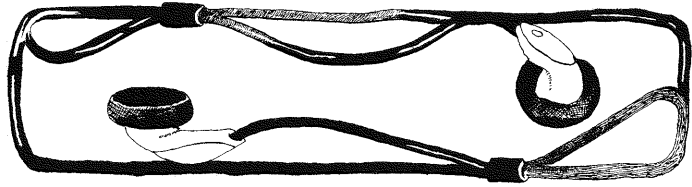


ルのコーチをしているという。ジョンの娘の十四歳のニコルは高校一年生で、いつも電話をかけている典型的なティーンエイジャだと手紙は詳しくかった。ジョン自身は子どもがいないが、教会のことで忙しく働いていると書いてあった。私はコレット夫人が子育ての忙しい中で私を泊め、教会の日曜学校に熱心だったことを思い出した。

### 終わりに

二年間にわたって、「私が幼児教育を志した頃」を書いて来た。その前半は敗戦直後の日本のことを、後半は一九五一年から一九五三年まで過ごした米国の家庭の体験を記した。その第一回を書いたとき、君が代の法制化が国会で決められようとしていた。これは強制ではないと説明されたが、その後の成り行きを見ると、学校現場の混乱のもととなっている。

後半のアメリカの家庭を記すのはあまりにも私的なことではないかと思ひ、途中で止めようかと考えたこともあった。アメリカの友人の実名を記すのはプライバシーにふれるのではないかと思つたとき、弁護士のネルソン氏は、だれもがあなたを心から信頼しているのだから、遠慮せずにフルネームで記し、写真をも載せることを勧めてくださいました。世界の平和には政治の舞台の大きなことも必要だが、その根底には普通の人達の友情の交わりがもっと大きな力をもつ。



今回最終回を書いているとき、「つくる会」の教科書と首相の靖国参拝が世論を二分している。

あれから五十年を経たいま、日本も変化したし、アメリカも変化した。日本は、この五十年間に培われた国際的平和志向から復古的ナショナリズムへと逆戻りするのではないかと心配だし、アメリカは原爆をも正当化する自国中心主義に走るのではないかと恐れる。いずれも個人には大き過ぎる課題だけれども、現代人が日常を生きるのに目をつぶることはできないのではないか。初心に戻って、戦争が終わったときの解放感のとは何だったのか、親しい人達が無念の思いを抱いて死んだのは何故だったのか、それを考え続けることはあの戦争が日本人に課した課題なのではないか。

いま、保育の実践にかかわる者として考えるとき、相手を対等の人間として見る人間観の欠如がその根底にあると思う。軍隊にとつては兵隊は道具に過ぎなかった。家族をもった人間ではなかった。外国人は日本人と同類の血の通った人間ではなかった。子どもは人権の外にあった。だれでも再びそういう狭い考えに陥る危険をはらんでいる。そこで踏みとどまって、広い目で相手をも見直し、互いに優しくなれるように、そのように自分を持ちこたえさせる方が文化であり、教育ではないか。保育研究もその中にある。